

Chapter 5

1 唐紅

赤門は絹のような光沢を帯び、鮮やかに濃い、唐紅の深きに、眩い黄金の装飾金具を惜しみもなく、ふんだんに使い、その大きさや、偉容とともに豪華絢爛なること極まりない。柱や梁や桁や垂木や臺股を荘嚴する角飾り、門扉を覆い尽くす鋳ひたしや鋳かざり、意匠を凝らした釘までもが黄金で、浮彫や文様が鏤められ、鋳師が伎倆を尽くしていた。

繁縷なるまでに燦々としてなおかつ堅牢なこの建築は元禄の改修時に現在の形になったものだが、その最初は源平の時代、貴族の力が萎えた時代である。

海路に繋がる道と、都に繋がる道の交わる地点に聳え、その高さは三十四メートル。分厚い龍文の扉を持つ八脚の二重門をなし、角柱の一边が二メートルを超えていた。

猛々し神々しきヤマトの軍は苦戦を強いられる。

赤門家の一族郎党は屈強で、龍の形をした熱のない炎を上げる火矢で激しく攻撃した。炎は龍となってヤマト軍の中で烈しく暴れる。蝦夷征伐の神軍は鯨を象った尖突門扉破碎攻城器に神々しい雷電の威力を与えて眼も開けられないほど閃光を放つ五色の神雲に乗せ、突撃を試みようとするが近づけない。

業を煮やした神軍はおぞましくも怖ろしい黄泉の国の泉津醜女よもつしこめや八十枉津日神やそまがつひのかみを放ったが、噴火のごとき龍炎の火矢がさらに必死の勢いになって、まったく近寄れない。そのときだ。現われたるは磐筒男命。

「ええい、情けなや。我が神力を見よ」

手に光華なる閃きの稲妻の戟を持ち、これを投げつけると、地を裂きつつ宙間を貫くその神なる武具によって赤門の扉が轟音とともに

に破られた。

凄絶なる形相の泉津醜女や八十枉津日神がなだれ込む。鬼神の怪異醜怪な姿形が眞神の兵に飛びかかる！

「撤退だ、撤退だーっ」

赤門戸町の唐紅の炎門は突破された。町をヤマトの神軍が第一の鳥居に向かって進軍する。薙久簗町にある眞神の古街道の入口に到達するのも時間の問題であった。

「さて、今度は敵の本隊を攻めに行こうか」

ヤマトの神軍先鋒隊が一時退避すると、イユノは仲間を率いて自室に戻り、羊皮紙装丁本の城砦の荘重な書斎兼会議室に入るなり、そう言い放った。祖父母や両親の変容ぶりもまるで当然のように受け止め、まったく意外を感じない自分を不思議に思った。思ったが、気にしない。この世に意外なんてない。ふん。大したことじゃないわ。

「さあ、ショータイムね。赤門戸町の唐紅の門で粉碎してやるわ。ふふ」

アカネがスマートフォンを手に、

「待って。」

おじいさんも言っていたでしょう。眞神の御山に行くのよ。

眞神の軍として戦わなくっちゃ。指揮は彝之家が執るわ。こういうときのための体制は昔からできているのよ。

わたしたち眞神族はけして油断していたわけじゃないのよ。現にわたしの赤門家のような者が代々歴史の裏で活動していたわ。こうした場合の体制は火々禽の柵の戦い以来、連綿と続いていたのよ。

軍の総指揮は代々彝之の黒龍分家が司っているわ。今回は彝之^{りよう}龍肯がしているよ。

黒龍分家の屋敷は黒龍ヶ淵の傍の丘の上にあるわ。櫓のような家よ。先祖代々彝之家軍事部門の総帥を司る家柄だからね。

茸柳、あんたは白舟家に連絡がいくはずだわ。すべての臣おみに連絡が届くよ」

イヴイル枢機卿は櫟oakの書棚にある様々な典籍を手にして眺めていた。

「結局、シノブ・ラクシャシーは見つかりませんね。

すべての謎は、イユノ・アスラ、そもそも眼覚めるべきではなかったはずのあなたがなぜ眼覚めようと考えていたか、なぜこの時期なのか、そして誰がそれを知り、誰がそれをヤマトに伝えたか。

シノブがそれに関わっていたかどうか。彼女はそもそもあなたに付きまといて何をしようとしていたのか。

そのあたりに絞られますね」

イユノも眉を顰めた。

「そのようね。

いずれにしろ、いまは何もわからない。いつも思考を廻らせているけれども、わからないことにばかり時間を使うわけにはいかないわ」

暖炉の火がぱちぱち爆ぜる音のみが聞こえる。

ようやく茸柳が、

「いや。

まったくわからないわけではないよ。アスラの復活を予想していた者は意外に多いはずだ。

現にアカネ、君もじゃないか。シノブがアスラの眼覚めを（完全には知っていないなくても）予測していたとしても実は不思議ではないのかもしれない。

アカネ、君はなぜアスラの復活を予測できたんだ」

アカネは戸惑いながら、

「わからないわ。

特に誰かから教えられたわけでもないし、復活するってのが通説として眞神の内部にあったというのも（少なくともわたしは）聞いたことはないわ。

ある種の不安のような、潜在的な感情よ。たとえば暗闇って理由もなく怖いでしょう？

それに似ている。みんな何となくアスラが甦るって感じていたし、そういう曖昧な理由にもかかわらず、昔からそれに備えて現実的な体制が作られていた。

シノブも眞神の一員だからね。そういう動きを知っていても不思議はないといえるわね、確かに……」

ユレヒトが考えに耽りながら、

「わかるような気がします。何となく。僕ですら」

枢機卿は本を閉じた。本のタイトルは『存在と時間"Sein und Zeit" 1927 (Martin Heidegger 著)』だった。

「不安や恐怖は存在の意志に基づいています。それは常に未来への関心です。結局、時間はそれによって生まれるのです。

一足飛びに言い切ってしまいますが、宇宙のすべてがそれに貫かれています。生命のみならず、物質のすべての基底にそれがあるのです。すなわちそれが存在への意志と言ってもよいでしょう。

(生命ある者のみに限らない、すなわち普遍的な) “死” への恐怖が物質の複雑化と生命の進化とを支えてきた、いや、促してきたのです。とすれば」

イユノが強く頷き、

「その可能性はあるわね。

宇宙の生命に喝を入れるためにアスラは復活する。美しいテーマだわ。綺麗過ぎるくらいにね。

そして革命に怯えるヤマトの現体制ってことか」

ユレヒトが、

「しかしシノブ・ラークシャシーは、なぜ」

茸柳が笑いながら、

「よい方に解釈すれば宇宙生命に喝を入れるという壮大な大義のためにイユノを眼覚めに導く手伝いをした…… (笑)」

アカネが頬を膨らませ、

「いくら何でもそれは考えられないわ。

って言うかさ、そんな冗談言ってる場合じゃないよ。いま戦争が始まろうとしてるんだよ。

さあ、連絡はついたわ。

神軍は五〇〇〇を率いて難久簗町を通過、古街道を進軍して間もなくこの龍吞村の域内に入るわ。

白舟水軍は眞神川沿いに軍を展開し、平衛軍と合流して第一の鳥居でヤマトを迎え撃つ。そのための拠点がここよ。平衛家の分家や家臣がこの邸宅に集まって前衛本部とする。

そしてイユノ、あなたには眷属を率いて眞神家本家の防護にあたるように指示があつたわ」

「ふと思ったんだけどさ、神カムイ彝あれず亞を呷厨御ってアスラと同一なんでしょう？ 何で火々禽の柵の戦いは負けたわけ？」

イヴイルも頷いた。「確かに不思議です」

茸柳が、

「そうでもない。彝亞呷厨御は一切だ。すなわち敵も異和も背離も離反も叛逆も影もない」

「それ、わたしの決まり文句なんだけどさ……じゃ、何でアスラは、って言うか、わたしは闘えちやえるわけなのよ」

「闘うこともすべてのうちの一つさ」

「それもわたしのよく使うロジックなんだけどさ、じゃ……」

「いや、もういいだろう。議論は無意味だよ。

さあ、行こう」

龍の牽く車に乗ってたちまち丘の上の彝之家分家に着いた。家の上には篝火が焚かれ、光り輝く鎧兜などの武装具に身を固めた男たち立っている。

「平衛イユノよ、イユノ・アスラ、彝いしゅら釐るの羅婁よ」

すぐに通された。屋敷は櫓というよりは三重塔に似ている。高台の上にあるので眞神郡全体が見渡せそうだったが、さらに高い物見台を丸太で仮設していた。すべてが激しい緊張感に包まれている。

最上階に作戦室があった。龍肯は名に相応しく龍髪を靡かせ、決して長身ではないが威風堂々としているのに、繊細な、翳りのある憂鬱な表情を湛え、妙に親しみを抱かせる青年であった。

「よく来た。いま赤門が破られたという報告が入ったところだ」

イユノはその声がイタルに似ていると思った。もつとも実際に会ったのは夢の中のみだが。

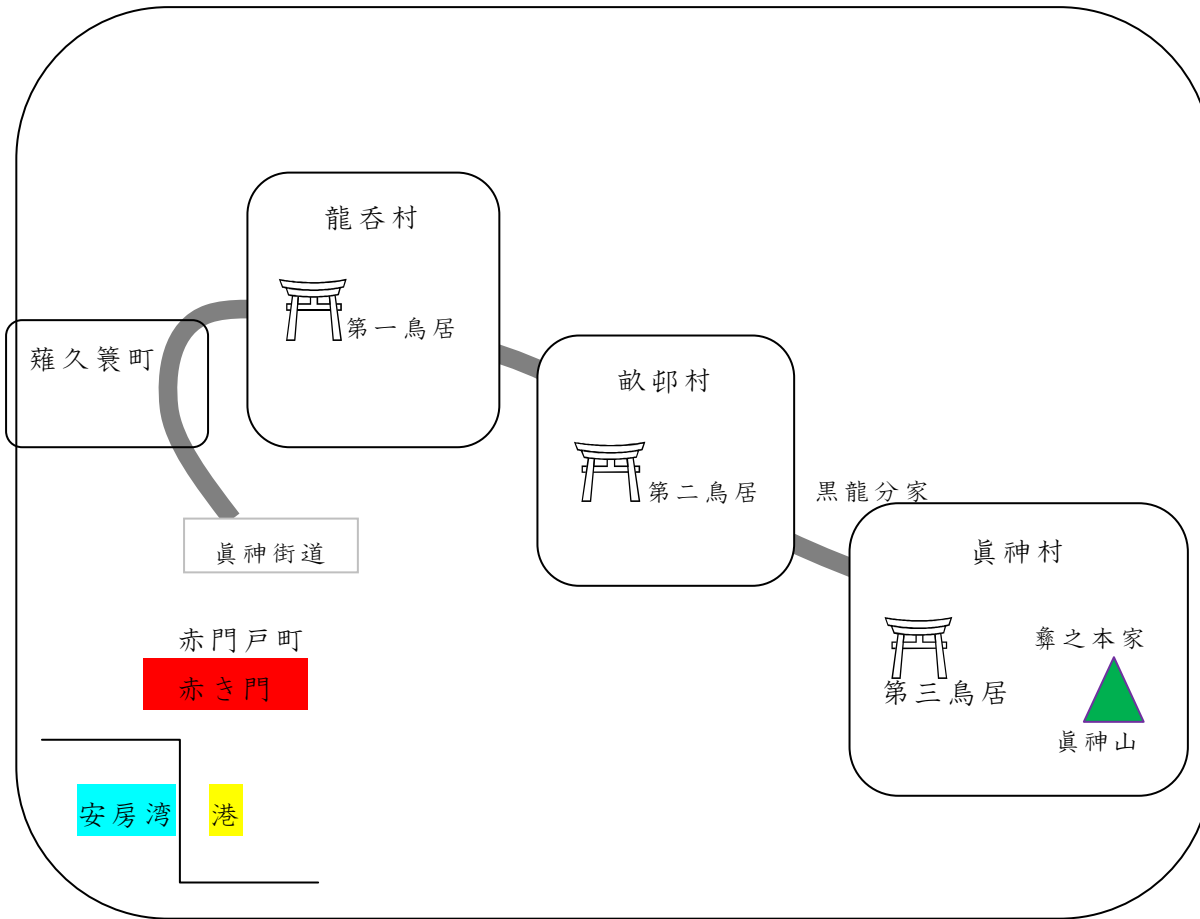
「そんな！」

アカネが小さく叫んだ。「ごめん、ちよつと家に電話するわ」

それを見送ってから茸柳が、

「僕らが行きます。龍呑村の第一の鳥居で迎撃します」

「いや」 龍肯は言った。「まずは地図を見てくれ」



「まずは第一の鳥居に軍の八割弱を配す。

その筆頭は平衛家だ。平衛が高見の赤き城を本拠として指揮を執り、龍吞りゅうどんの八代家・天易家あまやす・彝佐家いさ、安房の揖屋家いや・安和之家あわの、薤久簍の天草家・乃戸家のと・中原家・葦原家、大雨の雨海家あまみ・衆善家しゅぜん・忌喪乃家いのみ・伊坐野家いざの・滄海家あうみ、赤門戸の鰲家・蹈輔家・佐貫家が布陣する。男女約一千名。

第二の鳥居が畝邸ほむらの炎家ほの・白舟家が布陣する。男女約百名。

第三の鳥居に眞神の天平家あまひらが布陣する。男女約五十名。

彝之本家・眞神山どうげんには同源家、天之家あまのが布陣する。男女約百五十名。

イユノ・アスラは最初に彝之本家に赴き、聖令を受けよ。これによって眞神の聖戦士となるからだ。そして聖令後は第一の鳥居に赴き、聖戦を戦え」

「いいよ。わかったわ」

眞神に飛ぶ。

眞神川の激流に囲まれ、霧霞漂い、偉容を誇る縦長長方形の神聖なる山。頂には神が降臨するとされる磐座と縄文時代の祭祀の跡があり、神彝カミイ之眞斗のまとが王都彝玖鷺いくろを築いたと伝承される聖域。

いくつもの篝火が焚かれ、たくさんの鎧兜の兵士たちが物々しく行き来し、また警護している。上空にはガルーダや応龍や鳳凰が旋回し、敵の到来を確認しようと物見しつつ、天空からの襲撃に備えていた。

龍の牽く車を降りる。

「平衛家本家、神聖なる光輝のイユノ・アスラいしゅらの彝い盤ばん羅ら婁ろうよ。そして彼女は赤門アカネ・イシユタル。闘う生命と豊穰の女神だわ。その後ろはわたしの臣下よ」

「おいおい、イユノ。僕は眞神水軍の白舟家だ。茸柳・ヴィシユヌ」

「で、他の男たちがわたしの供の者よ。そう言えばいいんでしょ、茸柳？」

「どうぞお通りください。高貴にして神聖なる方々」

檜皮葺の神厳な鼻之家門をくぐり、龍爪橋を渡る。橋の中ほどに二重楼門があり、重装備の装甲兵がクリムゾンcrimsonとラピスラズリlapis lazuli色の大槍を持って立っていた。イユノが通るとき武者たちは斉唱する。

「眞神は常盤永久の真義、真幸く光華明彩く真実」

櫓門のある岩棚に着く。そこには機甲兵が屯している。門をくぐった。左手、櫓門とは直角の位置に石垣を切った高麗門がある。

この高麗門は左右に砦があり、砦と砦の間に橋が渡され、数多の装甲機兵が伏していた。

門の次は板橋。鎮守の杜のように鬱蒼とした狭い岩棚に着く。清流が瀧となって眞神川へと落ちるその場所には祭壇が仮設され、古代の紫摩黄金の装身具に身を飾った戦士が聖句を唱え、祈祷していた。

「呪術戦ですか。これは、眞神語ですね」

イヴィルが無関心につぶやく。

彼を一瞥したイユノは、

「葺柳に聞いてよ」

「枢機卿の言うのは少し当たっている。正確に言えば古代眞神語と古代エジプト語と古代ギリシア語とインドのサンスクリット語で唱えられている。これを聖四重唱というんだ。

ちなみに内容は聖典の聖句」

他にも水音が聞こえる。傍らに鑄鉄製の龍首があり、そこから清水が迸っていた。手水場である。

一同、口を漱ぎ、手を洗った。

葛折りの狭く古い苔生した石段を上る。そちこと欽けいたが、既に空は薄明となっていたので、さほど危なげではない。折り返しごとに兵が立っていたり、木の上に坐っていたりしている。警護というよりは深い瞑想に耽っているかのように半眼で静寂であった。

上がった場所は縄文時代の城砦門がある狭く暗い岩棚だ。巨石の柱に巨石の屋根を載せていた。次に吊り橋を渡って大きくて開けた岩棚に着く。

木々の向こうに傾斜の急な、尖った屋根の母屋が見えた。葬之家の幽邃ゆうすいにして厳樞いつかししくも広壮深玄なる屋敷は又、眞神神社でもある。

ここにはもう篝火もなく、警護の衛兵もいなかった。ただ寂莫じやくまくがあるのみ。

切妻破風の大きな正面玄関。その威風は人を圧した。

イユノが声を上げた。

「案内頼まう」

沈黙。衝立の龍がじっと睨むだけ。

奥は天井の高い板の間。だが、行き着く先に壁はない。そのまま屋外に抜け、そこには廻廊があった。

神社建築の構成を楼門・廻廊・幣殿・本殿に分類する見方に従うならば、この廻廊に対して葬之家の屋敷は楼門の役割を果たしている。

「不思議な家ですね」

ユレヒトが言う。

「確かにそうだね。初めて見る人には」

茸柳が合槌を打った。

「ここは聖なる場所なんだ。個人の住宅でありながら公の場所なんだよ。僕ら眞神斗人（まがみとうじん。斗たたかう眞神人）にはね。

見たとおり、廻廊を廻らせた神前庭の正奥は檜皮葺の弊殿になっている。

内部は閉ざされて見えないけれども、捧げ物を献上するため無垢材の臺があるんだよ。

しかしその弊殿のさらに奥には、あるべきはずの本殿はないんだ。ただ於上うえふかすのみかど不葺御門がある。

つまり大鳥居が立っているだけなんだよ」

「なぜですか。どういうことなんです？ 何か意味があるんですか」

「何もないってことは何も意味がないってことよ。あるがままに考えなさい」

イユノが口を挟んだ。

笑いながら茸柳が、

「そうとも言えるね。」

しかしそこにはあるがままがある。自然^{あるがまま}フィシス *phōtis* または事実そのままな *positiv 真実 αληθεια* だ。

そこには荒巖の数々とそこに根を蔓延らせる老樹の群生があるんだ。あたかも眞神山頂にある磐座を直截崇め奉らせるかのような造りになっているんだよ。

ちなみに鳥居は三輪鳥居（明神鳥居の左右に小さな明神鳥居がある形式。明神鳥居とは笠木の下に島木があり、左右端が反っている形式）に似たタイプのもので、通常よりも笠木の反り具合が強い。眞神風さ」

「そうですか」

ユレヒトはもうそれ以上訊かなかった。

アカネが言った。

「けどさー、わかってたことだけど、ほんとに警察も何も動かないねー。国家ってやっぱり怖いよ。」

すべて権力側の恣意で捻じ曲げられるんだね……結局、昔もいまも大して進歩していないんだ」

イヴイルが頷きながら、

「少なくともこの地方一帯はそうですね」

「ふうん。」

やりやすいわね。邪魔が入らないわ。唐紅に染めてやるよ」

イユノがそう言い放った。

2 革命

「悪い知らせです。」

ヤマト神軍の兵四千がJ R 那裂線^{くにさき}沿いに龍涎^{りゅうぜん}峡谷を通り、陸路^{りくろく}からも行軍中とのことです」

案内をしてくれた禰宜がそう言った。彼らは眞神族の中から選ば

れて一年間禰宜を務めるのだ。全体に深い黒雲が覆うような、チエロの低音部の重奏のような雰囲気になる。

「敵は九千か」

ユレヒトだけがつぶやいた。

「さ、ここです。どうぞ」

四十八畳の和室だった。襖や貼付け壁や屏風、違棚の小襖や長押の上の壁面にも金箔を施し、その上に朱や濃墨、群青緑青白緑の濃彩を奢る金碧障壁画、岩に根を張る常緑の松や雪月、紅葉黄葉、桜霞、絢爛たる部屋だ。そこで待っていたのは葬之いれつ。当代葬之家当主、第五二四代なる葬之いてふひや爲弓阜飛也の曾孫だ。

「ご苦労だった。

俺はみんなのように神ではない。王家の血筋であつてもただの人だ。このような聖戦を闘う闘い方、その術を持っていない。当主である曾祖父、爲弓阜飛也は百歳に近いが、幣殿で拝神儀を続けている。

今宵、俺は曾祖父に呼ばれた。

『べ裂よ、この闘いは飽くまで正義を貫き徹せ。義を尽くし、言啓ことひらきせよ。

その行動こそが真理である。行え。威儀を正し、身辺を肅さやし、爽すみ明あきらく睿あきらくせよ。

真の革命を起こせ。真奥に於いて天命が革まったことを世に示せ』
すなわち曾祖父が申すのは、我らが潔癖であり、清らかで正しいことを大日靈貴（天照皇大神）ことひらに言啓すみあけきして清明あきらく睿あきらくせよ、という意味だ」

イユノが激しく反発した。

「どういうことよ！」

べ裂は端坐したまま冷厳に応えた。

「言ったとおりだ。誤解を解いて和睦せよ」

アカネすら畳を叩く。

「バカな！

濡れ衣を着せられて一方的に詰なじられ非難され、赤門まで破壊されて、こちらから申し開きをしろと言うのか！　ありえないっ！」

イユノは感情を抑えた。

「それにしてもこれは葦原家のシノブの陰謀だ。その真意を明らかにせずして莫迦正直に平伏して主たる天照皇大神に説明しようとしても、ただただ徒労に終わると思うが」

茸柳も、

「僕にも聖なる族長、爲弓阜飛也の考えがわかりません。敵は実際、眼の前に攻めて来ているのです。これに理を尽くしても」

しかし、裂は席を立った。

「王命は天命だ。神彝亞咽厨御の天啓と思え。

さあ、行け、イユノ・アスラⅡ彝瓮羅婁」

イユノも立ち上がった。

「待て。」

聖令を受けると聞いていたが」

未来の第五二七代継承者は烈しく振り返り、

「聖戦をせぬ以上、聖令は不要。おまえがこのミッションを成し遂げたとき、聖の聖なる眞神の戦士として聖なる勲位を叙する」

「何だと！　このアスラに向かって！」

茸柳とアカネとユレヒトと淋太良とイタチと手足胴を抑えてイユノの動きを制した。「待つて」「早まってはいけません」「落ち着いてくれよ」「いけません」「ご無礼します！」

「ええい、離せ。糞っ垂れめっ！」

裂は去った。

一同は龍の牽く車に戻って談義する。

「どうすべきか」

しばしの沈黙。しかしアカネが、

「あまり考えている時間はなさそうだ。メールよ。第一の鳥居が撃破されたわ。」

根裂神と磐裂神が龍吞神社の奥の社に秘匿されていた結界の臍

を壊し、イユノ、あんたの家は占拠されたわ」

「すぐに取り返してやるわ。」

結界の臍って何？」

「家の大黒柱みたいなものよ。」

それがないと眞神の結界は崩れてしまうのよ」

「そうなの？」

「そんなこと言ってる場合じゃないわ。第一の鳥居は背後から襲われて眞神は全軍、畝邨村にある第二の鳥居に敗走。」

ヤマトの神軍は龍吞村に入った。畝邨では決戦の準備が進んでいる」

「畜生！」

イヴイルが言った。

「なぜ結界の臍の場所がわかったのでしょうか。イユノ・アスラ、あなたは知っていましたか」

「知るわけないじゃん」

「じゃ、なぜヤマトが」

ユレヒトが声を上げる。茸柳は顔を顰め、

「裏切りだ。」

スパイがいるんだ」

「シノブ・ラークシャシーだけではないようですね」

みんながしいんとした。

音もなく進む龍車の中は薄明るく、不気味なほど静かだった。

イヴイルが言葉を続けた、

「これはやはり事情を正確に見極めてからでないと。」

迂闊に和睦を提議しても（そもそも相手が有利なのにどうして応じるもんですか）、無意味どころか、大変なことにもなりかねないものと思われますね」

「イヴイルの言うとおりだわ。」

しかしシノブや他のスパイを探すよりもまず敵の神軍を止めなくては」

アカネも頷き、

「そうだね、イユノ。」

どうしたらいい、茸柳、あんた、考えてよ」

「イユノが簡単に取り返せるというのだから、平衛家の洋館を奪回しよう。そして結界を復活させ、一の鳥居の防御能力を甦らせる。

そうすれば」

「そうすれば？」

「敵は一の鳥居と二の鳥居に囲まれ、僕らが背後から攻撃すれば眞神軍に挟撃はさみうちされることになる」

「よし。」

そうしよう。行くわよ、アカネ・イシユタル、イヴイル、ユレヒト、ヌエ、淋太良、イタチ」

「おお！」

イユノたちは龍車でたちまち洋館の傍に来た。

すると宙空に神が現われた。凄まじい大神気を放ち、大地を震わさんばかりであった。茸柳の顔色が変わる。

ひはやひのかみ
「燐速日神だ。」

火の神から生まれた。『古事記』では伊邪那岐命が軻遇突智神かぐつち（火産靈）を十拳剣で斬ったときに剣の先端から滴った血より磐裂神、根裂神、石筒之男神いわたつのをのかみが生まれた。剣の柄から滴った血より闇淤加美神くらおかみ、闇御津羽神くらみつはのかみ、高淤加美神たかおかみが生まれた。

そして刀身から滴った血より生まれたのが、甕速日神みかはやひのかみ、武甕槌神たけみかづちのかみ、あの燐速日神だ。

古代の大神威、大靈威の一つ。天に輝き大地を炙って旱魃させる強き日射の光だ」

すると神が詠唱を響かせる、

「復劔鐔垂血、激越爲神。 號曰甕速日神。 次燐速日神。 其甕速日神、是武甕槌神之祖也。 亦曰甕速日命。 次燐速日命。 次武甕槌神。 復劔鋒垂血、激越爲神。 號曰磐裂神。 次根裂神。 次磐筒男命。 一云、磐筒男命及磐筒女命。 復劔頭垂血、激越爲神。 號曰闇竈。 次闇

山祇。次閼罔象」

噴火の溶岩のような烈火の稲妻が龍車に向かってまっしぐらに襲ってくる。彗星のようでもあった。

「うわ！」

車内で茸柳が思わず身を逸らす。

イユノは素早く呪を唱える。

「曩莫三曼荼縛曰羅赧憾（ノウマク・サマ ندا・バザラダン・カ
ン）**衆**」

不動明王 **अचलनाथ** の印契を結び、それを放つ。

イユノは龍車を出て宙に立った。

「何、あんた？」

人の家に乗つ取つたつもり？

「占拠した城でお留守番ってこと？」

神は無表情で厳つい。

「あまりお喋りを楽しむ趣味はないようね。いいわ。誰もみんなそれぞれだからね。」

じゃ、行くわよ。

俺阿毘羅吽欠袞婆呵」

अ (ア) वि (ビ) र (ラ) ^{१०५} (ウン) क्षां (ケン) は地・水・火・風・
空の五大種字を表わす。大毘盧遮那成仏(マハー・ヴァイローチャ
ナ महावैरोचन)の胎藏界真言(陀羅尼、マントラ मन्त्र)だ。

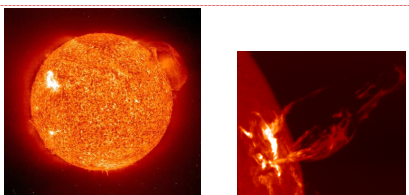
アスラは地球の大きさを超える紅炎 solar prominence（紅炎とは太陽の彩層が突出したものを言い、その大きさは観測上最大のものは約三十五万キロメートル。ちなみに地球の直径は約一万三千キロメートル）を噴射した。

「うおおおつ」

さすがの燭速日の大御神もたまらない。

炎に包まれ、退散した。

その勢いでイユノ・アスラⅡ彝髡羅婁は赤煉瓦の洋館に突撃、神の兵や眷属を蹴散らし、返す刀で龍吞神社を襲撃、いまにも阿修羅



の小社を焼き払おうとしていた神軍の精兵を千切っては擲つ。

あつという間の圧勝だ。イユノはアカネ、ユレヒト、イタチ、
太良たろうにそこを守らせ、家に戻った。
淋ながあめ

「さあ、お父さん、お母さん、お祖父さん、お祖母さん、無事なら
さつさと出て来て」

「心配ない。わしらは無事だ」

「よかったわ。」

ねえ、結界の臍はどこにあるの？ 復元できるかしら？」

真弓まゆみ劔衛門が応えた。

「奥の社に出雲の社がある」

「出雲の社？」

何だってそんなもんがあるのよ」

「出雲から大国主命の分御魂をいただいて祀ってあるのじゃ」

「それはわかるけど、だから何だよ」

「平和の証に」

「平和って、それが戦時のための結界の臍がある場所なの？」

「そうじゃ」

「わかった。ともかく行こう。復元できるのよね？」

「綱を再び繋いで眞神の鹽と清水で浄めれば」

「すぐやるわ。」

茸柳、一緒に来て。イヴイルとヌエはここで龍車の中で待っている。
て。アカネたちをこっちに戻らせるわ」

あつという間に眞神の水を掬い、巖鹽を集めて龍吞神社に帰る。

「アカネ、イタチ、淋太良、急いでわたしの家へ戻ってちょうだい。」

またあそこを奪われちゃやり直しになっちゃうからさ」

奥の社へ登る。

あつた。小さい。

開ける。

「ああ！」

極彩で玲瓏で高貴な凛たる姿の神の像がある。

「これが大国魂神、大穴牟遲神、大己貴命……」
おおくにたまのかみ おおなむちのかみ おおなむちのみこと

大国主ね」

茸柳が、

「これか。」

綱だ。注連縄みたいだ。出雲大社にあるような形だ」

「さあ、さつさと仕事しましょう」

鹽と清水で浄めて結んだ。

「神葬亞呷厨御様にお祈り申し上げます」

空気の質が変わる。

「どうやら結界が復元したようだ」

茸柳がそう言う。

「じゃ、追撃しましょう。短時間で片づけるわよ。」

すぐに陸路で来た四千がこちに迫っているんだから」

「そうだった。僕としたことが、いまこの瞬間には念頭になかったよ」

「誰でもたまには忘れるわ。でも、しっかりしてね」

「実は不思議に思ったんだ。」

いま僕らを襲っているヤマト軍は武甕槌や布都神（布都怒志命、布都御魂、経津主神）などの鹿島・香取の神、または磐裂神・根裂神のような下野の国の星の神だ。関東の神々だった。

ちなみに磐裂神・根裂神は北極星を、甕速日神・樋速日神は太陽を、武甕槌神は雷電を表わすが、日光東照宮が真南（太陽）に向いて、その背面が真北（北極星）であり、また日は火の源であり、人類に火を齎し、火種となったものが雷であったという太古の記憶を考えると、これらの神々は深い関係を持つ。

まあ、それはともかく注目すべきは最初に来た者たちだ。前衛とも言える先遣隊は素戔嗚を祖神とし、大国主神を祭神となす出雲系の使いだった」

「それがどうしたの」

「いや。」

武甕槌神と経津主神は出雲へ天降って、大国主命と国譲りの交渉をした武神だ」

「で？」

「まるでお目付け役だな、って思ってたね」

「は？」

「いいんだ。行こう」

平衛家の洋館は戻って来た臣下や眷属らによって再防護されていた。龍吞神社や奥の社もすぐに防護体制が整えられるらしい。アカネが連絡を取って、指示してくれたのであった。

「サンキュ。」

じゃ、わたしたち、攻撃に専念できるわね」

「だいぶ集まって来たから、もう防護は十分。」

これから軍を編成するわ」

「そうね。幾許かは第一の鳥居の守りに向けて。それから薙久簀方面へも偵察に数名ね。」

さつき思念を差し向けてまさぐったんだけど、ヤマトの陸路軍が（敵の仕込んだイリュージョンでなければ）安房市を横断して赤門戸町に差し掛かっているわ。

薙久簀に入るのは朝方、八時頃じゃないかな」

「わかった」

「さあ、勝負よ。天命が革まるかもしれないわ。そうよ、これは革命の朝なのかもしれない。」

今日は学校休むのよ、茸柳、アカネ」

「わかってるわよ」「当然だよ」

既に時刻は黎明の時であった。

3 出雲

いわつつおのかみ
磐筒男神の神力で神兵たちは第二の鳥居を激しく攻めていた。

日の昇る位置にある鳥居は見上げるほど高く、難攻不落の神霊結

界を築いている。

「おかしい。第一の鳥居の結界が復活しているように感じる」
神軍にいる陰陽師がそう言った。彼の名は安曇あずみの野滄溟。

「見ろ、あれは何だ」

西の方から東征してくる軍があった。

「あ、あれは」

滄溟は呻いた。

「阿修羅だ。犍磔羅婁」

先頭は唐紅に燃え燿く高貴なイユノ・アスラ。手に剣を持っている。その長さは二メートル、刃渡りが五〇センチ。紫摩黄金にこれまた燃えるように爛らかに燿いている。

彼女の背後には碧きアカネ・イシュタル、白いローブのイヴイル、龍車を操る漆黒のヌエ、水色のフロックコートのユレヒト、淋太良、イタチ、そして平衛家の者やその臣下・眷属約一五〇名。

「しまった、背後を取られたぞ」

古街道上で二つの軍は百メートルの距離を置いて対峙した。

「一対一で勝負しろ」

イユノがそう叫んで進み出る。

誰も出てこない。

イユノはそれでも進む。

矢が飛んだが、空中で燃え尽きて落ちてしまった。投槍も同様である。

彼女は進んだ。一の腕の青龍の刺青が青白く燃え上がる。終に神軍に着く。前衛の兵が慄いて避けた。どんどん進む。軍が割れる。まるで海を渡るモーシエスだ。砕氷船が氷を割って進むように。五千の兵の海が裂けた。

眼の前に立ちはだかる男の神が。

「いい度胸だな」

「命もいらず名もいらず、さ」

「ええい、我こそは磐筒男神ぞ」

筒とは「ツツ」であり、粒を言い、星を意味した。

「そして我こそが大いなる磐裂神」

「我は根裂神」

いずれも星の神、または明星、すなわち黎明を導く神。

イユノは鼻で笑った。

「ふ。それがどうしたの？」

錚々たる顔触れだけど、わたしは宇宙よりも巨大なのよ」

神代の鋼の鎧を身に着けて大きな雷を佩刀し、地鳴りのような神威を做す。

「覚悟しなさい」

しかし三柱の神はそれに応えず、一枚の板を出して、楯にした。

その板は紀伊の国の気高き芳香の檜の大木を削ったもので、濃い墨で雄渾な文字が記されている。

書かれていたのは『伊邪那伎日真名子、加夫呂伎熊野大神、櫛御氣野命』という神の御名。

「イザナギの愛し子で、神聖なる祖神にして熊野（出雲の意宇川の水源地である天狗山の麓にある）に鎮座する大神、クシミケヌ（奇し御食）ノミコト」という意味で、これは素戔嗚尊の別名であるとされている。

「うつ」

イユノが歩みを止める。

「海の水底の根之堅州國の神か。」

なぜだろう。闘気よりももっと深い感情を感じる……」

磐裂神が剣を持ち出し、地に突き立てた。剣は師靈劍（布都御魂劍）という霊劍で、佐士布都神、甕布都神、建布都神、豊布都神、経津主神の御名を持つ（なお、「ふつ」とは断ち切るときの音を表すという）。

神劍は武甕槌神の姿を映写機のように映じた。大神の幻影は楯に向かって唱えた。

「出雲の主、熊野の大御神、奇御食尊よ、歌いたまえ」

紀伊の楯は和歌を詠じた。

「磐代いわしろの 浜松えが枝を 引き結び ま幸さいくあらば またかへりみむ」
（『万葉集』巻二の「挽歌」）と歌った。これは天皇への謀反の罪で若く（恐らくは一七か、一八歳）して処刑された有馬皇子が自ら傷みて松が枝を結ぶ（祈りを込める）歌二首のうちの一つだ。なお、磐代とは現在の日高郡南部町岩代のことである。

イユノは烈しく動揺した。

封印され、自らを活かせずに屈辱的で暗鬱な日々を送っていた自分の鬱屈していた時代の心の古傷に、なぜだろうか、それが妙に沁みたのである。

「イユノ、何してんのよ！ 危ない！」

いつの間にかすぐ後ろに来ていたアカネ・イシュタル神がイユノを引っ張った。彼女の目の前に金剛杵（ヴァジュラ वज्र）が凄まじい勢いで振り下ろされる。間一髪であった。

「畜生、いったい、わたしに何をしたんだ」

イユノが齒軋りする。

威を立て直し、大きく腕を回し、光の灯った指先で宙空に炎の光の曼荼羅 मण्डल を描く。それを羯磨（三鉢杵が十字に組み合わせられた形の法具）शमभ に変え、光明真言を詠唱した。

「唵 阿謨伽 尾盧左曩

摩訶母捺囉 麼拏 鉢納麼

入縛攞 鉢囉鞞哆耶

吽

おん あほきや べいろしゃのう

まかほだら まに はんどま

じんばら はらばりたや

うん ー

金剛杵と羯磨とが雷電を迸り飛ばしながら拮抗する。地殻に影響し、大地が揺れた。海から轟音がして海面が上がった。

「ちよっとイユノ、日本が裂けちゃうよ」

しかしヤマト神軍は消えていた。

「何なんだ？」

アカネが傍に来た。

「追おうよ。追撃したい。彝之家の王命に逆らうことになるが、いまさら説明など無用だ」

「言われなくてもわかってるわ。追撃だけじゃなくて陸路のヤマト神軍も迎撃するわ。

それだけじゃもう済ませない。奴らをとことん撃退する。そうよ、眞神軍は火々禽の柵の戦い以来、初めて南下するのよ」

「しかし、イユノ」 茸柳が言った、「みんながついて来るだろうか。叛逆だ」

だがイユノは言い切った。

「いいえ、革命よ」

それを聞いてアカネが叫ぶ。

「いざ、者ども、我らがアスラ王に続け！」

驚愕すべき事態が起こった。多くの兵が共鳴したのである。

「ううつりやあああああああああああああ」

激烈な雄叫びが上がって早朝の天に響いた。

そのとき一人の男が近づいた。背が高く真っ直ぐな長い髪に驚のような尖った鼻。

「待て、平衛家の使命を忘れるな、イユノ・アスラ。彝瓚羅婁神の眞の道を違えるな」

「あんたは何者？」

代わってアカネが説明した。

「天平霧舟あまひらむしゅうよ。代々大臣に任ぜられる大貴族、天平家。その軍事部門を司る家柄、眞神軍の参謀役よ。

平衛家には主家筋ね」

「そうなんだ。でもムリね。

見たでしょう？

べ裂いれっは正義を主張しろと言ったわ。でもそんな余地はない。相手

は決めつけていて聞く耳を持たないわ。闘うしかないのよ。

無実の罪で裁かれるのは真っ平だわ」

「真実を貫き徹せ。」

それで滅ぶならそれも已^やむなし」

「じゃ、あんたはいままで何してたの？

二の鳥居で闘ってたんでしょ？

正義を説明できないのなら防護を放棄して滅ぶべきじゃないの？」

「それは君がさっき言ったとおりで、相手が聞く耳を持たないから已むを得ず防御したのだ。無闇に滅ぶ必要もない。滅亡は最後の選択肢だ」

「屁理屈だわ。納得できない。わたしは闘うわ。邪魔するなら、あんたも敵よ。」

彝之家も敵よ。眞神のために闘うわ」

「叛逆だぞ、平衛イユノ・アスラⅡ彝贅羅婁。わかっているか、眞神の精神を汚し、さらには平衛家の者の多くに迷惑がかかるぞ。」

おまえの一族の存亡にかかる問題だぞ」

「ふ。」

わたしが支配者になれば問題ないことよ。

そのとき罪を問われるのはあんたらだよ」

「そうか。」

是非もない。いずれ沙汰がある。

さあ、一時撤収だ、皆の者、ついて参れ」

霧舟は背を向けて悠々と引き揚げて行く。軍の大方はイユノらを振り返り振り返り、気にしながらも霧舟について行つた。逡巡したり、話し合ったりしている者もいた。

残ったのは平衛家に古くから恩顧のある者たちと一部の革新的精神の眞神神軍の兵たちだった。総勢二百名。その中には同源家の者がいた。名を布羅咒若^{ぶらじゅにや}という。ハリネズミのように髪がすべて後ろに反れて逆立っていた。体が大きく、魁偉な男である。

「同源家と言えば彝之家に次ぐ名家。なぜそのような者が」

イヴイルが訝しがった。布羅咒若はからからと笑う、

「異たるこそ眞神の血統。叛逆こそが同源家の家訓。闘いこそ斗人の名に相応しい」

「わかった。別に家柄なんて関係ない」

イユノはそう言った。

3 出雲健いずもたけのが佩ける太刀……

「食事でもしてはいかがでしょう。」

まだ朝食が済んでいないですよ、イユノ・アスラ」

イヴイル枢機卿が言った。

「そうね。そうしましょう。栄養の補給と休憩が必要だわ」

イユノが頷くと、アカネは、

「わかった。じゃ、さっそく陣を張ろう。兵糧の準備もしてあるんだ」

簡素な陣が張られ、釜が出され、米が炊かれ、みんなが握り飯を頬張る。竹筒の水で流し込む。

「さて腹一杯になったし、行くか」

龍車を囲むように兵が街道を進む。日が高くなる。たまに徒歩や自転車に乗った人、または車とすれ違うようになった。大概の人は細くて大きな四つの車輪の豪華な車を牽く龍を見て眼を丸くする。さらに古代眞神の鎧兜に身を固めた兵士たちを見てはもう口をあんぐり開けて……田畑の作業のない時期だったから、人に会うのは稀だった。

一部の神兵たち、土地神、海神とその眷属、聖霊又は鬼神、魁偉や妖魔、魑魅魍魎らは常人の目には映えない。ちなみにヤマト軍はほとんどが人間以外で構成されていた。だからほぼ全軍が常人には見られず、鳥船も見られていない。

眞神はむしろ多くが人間だ。と言ってもイユノのような神人も数少なくはないが。それでも人眼に映える。

軍は見られようと見られまいと気にする風もなく、荒魂を振るわ
せて進軍した。古き街道を。高き老大樹の列する道を。

幽邃たる眞神の遠景。静かだ。静か過ぎる。

意外なことに出雲のヤマト神軍はどこまで言っても痕跡が見つ
けなかった。龍吞村の第一の鳥居の外へ出て、薙久簀町の域内に入
っても見つからない。不気味な感じすらする。イユノは龍の牽く車
の豪華なクッションに身を沈め、顎を撫でながら窓の外を眺めて訝
しがった。

「まさか、諦めて完全撤退したとは思えないけれど、一時撤退にし
ては引き過ぎね。逆に怪しいわ。何か罫があるんじゃないかな」

アカネが、

「どっちにしろ、このまま行けば陸路のヤマト神軍と出会う。

最低でも、そこで海路の軍にも出会えるでしょうね。それより撤
退するはずがないから。

とは言え、わたしたちより数倍の軍勢を持ちながらこんなにも撤
退するって、やはり不思議よね」

ユレヒトが、

「斥候兵が偵察してきています。陸路のヤマト軍は薙久簀町の神中
洲中央公園で進軍を止めています。また、海路から来た軍は見つ
からず、彼らが乗ってきた天之鳥船も港に係留したままです。見張り
兵が数名いるだけです」

イユノが考える。

「船を潰すか」

茸柳が気のない口調で、

「いや、逃げさせて後をつけて本拠を叩くっていう手もあるけど」

「そう。いいわね」

「いや、冗談だよ、だめだよ」

「何よ、自分で言い出したんじゃない。そんなに否定しなくたって
いいじゃない」

「茸柳・ヴィシユヌには考えがあるのでしよう」

アカネが詰る、^{なじ}

「何よ、はっきり言いなさいよ」

「僕の推測でしかないから」

「まどろっこしいわね」

「アカネの言うとおりだよ、考えがあるんなら言いなさい」

「わかった。飽くまでも推測だよ」

「ほんとにまどろっこしい、前置きなんかいらないよ」

イヴイルが、

「まあ、彼のやり方は間違いではないですよ。さあ、ユレヒト、お茶でも出して。高雅な香りで心を鎮静いたしましょう」

車窓から見える風景は田舎の田園から郊外の住宅地風に変じ始め、行き交う人も車も増え始めた。

馭者台から漆黒のヌエが声をかける。

「この辺りまで来ると、そろそろ二百人の軍隊では目立ちます。兵たちの携帯電話番号を集めさせてから、一旦分散してみてはいいか」

アカネが、

「それもそうね」と言ってから、龍車の傍を歩いている淋太良とイタチに声をかけ、連絡先の収集を命じ、「集めたら各隊を作って散じるように指示して。ただし、散じると言っても、互いに見える範囲でね。」

適当に散りながら神中洲中央公園付近で再結集ね」

茸柳が口を開いた。

「かつて、そう、明治時代（明治十三年）頃、伊勢派と出雲派の間で、神道事務局神殿の祭神をいずれの神にするかで論争が起こった。事務局の中心を担っていた伊勢派は、天之御中主神、高御産巢日神、神産巢日神、天照大神の四柱を祀ることとしたが、出雲派が大国主大神を加えた五柱にすべきだと主張したんだ。」

そのとき『出雲派が神代より続く積年の宿怨を晴らさんとしている』『皇室に不逞な心を持っている千家尊福を誅殺すべし』など、

荒唐無稽とも思える怪しげで、不穏な風説が立っただけらしい。

そこから窺えるのは、出雲の国譲りが必ずしも平和的ではない、遺恨があってもおかしくないと一部では認識されていたということだ。

すると素戔嗚を筆頭とする出雲の神々は先陣に立たされたが、かと言って信用し切れず、常陸や下野の神をお目付け役として配したと見えなくもない」

「へー。一理あるわね。それで？」

「だとすると、平衛家の斎き祀る龍吞神社で出雲の神が祀られているのも何か機縁を感じるんだ」

「ヤマトと斗った者同士ってこと？」

「そう。もしかしたら結界の臍も誰にも教えられなくても、出雲の神々にはわかっていて、それを磐裂神や根裂神に教えたのかもしれない」

「なるほど。でも、いまの彼ら出雲のスタンスはどうなの？」

要は、敵なの、味方なの？　いいえ、少なくとも味方ではないわね」

「むろんだ。

だが完全なるヤマトの味方とも言えない。

こんな風に姿を見せないことも、そのことと関係しているような気がするんだ」

「何だかよくわかんないわね」

「事実には常に複合的で複雑系的だ。一様ではなく、拡がりも深さもあり、意味は立体的だ。そして変化し、生成の経過でしかない。誰にも捉えられないものさ」